
ライトロン～詩集～

タンポポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライトロン〜詩集〜

【Nコード】

N0858C

【作者名】

タンポポ

【あらすじ】

詩や歌詞を載せたいと思います。恋愛・夢・日常生活などの一話完結なので、気軽に読んでいただけた上で、共感してもらえたら光栄です。

タンポポ

泣いてるんだね

僕が慰めてあげる

たいした芸は持っていないけど
笑ってくれるかな？

もしかしたら

笑われたのかもしれない
君が笑顔でいられるのなら
どっちでも良いのかな

『大丈夫』は君の口癖さ
それが悪い癖になるなよ
辛い時にしか言わないくせに
冗談だろ 心配だよ

『こんな様じゃもう駄目かも』
夢ってそんなもんなの？
離れる事に脅えてたら
新しい物は何も
手に入らないんだよ
駄目じゃない

笑ってるのに

なぜか涙でてきたよ
僕は笑顔を保つてきたけど
そろそろ崩れそう

お別れとか
信じたくはないけれど
本音とは逆さまの事しか
口に出せなかった

本当にもう これで終わりなのさ
言いたい事はそりゃあるけど
どの言葉も全部
最後は『ゴメン』に
繋がりそう それじゃ嫌だろう？

『もう僕は 大丈夫だよ』
君の癖が移っちゃった
本当はとても寂しいけど
離れた後もたまに
思い出して欲しい
僕の事

そういえば もう
春が過ぎ去ってゆく
屋根の上に咲いたタンポポ
綺麗に咲いてた 二人で見えていた
あの日思い出すよ

到着した電車の隅には

君が座る席があるらしい
隣は今なら空席なのに
踏み出せずにドアが閉まる

『やっぱ君が大好きだよ』
最後に言いたかったな
本当にとっても後悔したけど
背中を押したのは僕だから
ほら 行っておいで

もし君がタンポポなら
僕の部屋にも咲くのにな
枯れてたはずの夢を追って
離れる間際になっても
言わないんだよ サヨナラは

ちゃんと咲くんだね
ありえない所にでも
水ならあげてるよ
君のコト思い出すと…

じゅんぺいとつ

嫌いな事は我慢してきたけど
好きな事だけしてちゃ
いけないのかな？

『頑張つて』は言わないでよ
もう頑張っているの

心を真つ二つに切られても
立ち直れないくらいへこんでも
何とか自分で直してみるの
それがそのまま強さになるの

そう信じて今まで生きてきた
お前から初めて聞いた弱音
あれだけ輝いてた光が
今度は逆に暗く見える

『私一人暗くなれば
他の周りの物が
光って見えるでしょ？
私もあなたを見すぎてた
少し距離を置いて考えたい…』

『終わりのない道を二人でどこまでも…』
なんて言いたくはないよ

ゴールがないと 迷走もいいところ
俺ら生命を持つちまったからには
必ず終わりは来るの 悲しいけど
ねえ まだ終わりたくないよ…

何もかもも上手くいかない
それで休むならば別に良いけど
辞めはしないで

俺は待つよ 心変わりしない
だって信じる事を辞めたら
すぐに誰かに盗られそう

人がこの世にいらなくても
困らないのは地球だけ
君がこの世にいないと
困るのは俺だけじゃない

今日の死者は

雲の上にいるじいさんの
抜けたヒゲの数らしい
全部あんたが決めちまうの
変えた運命すらも決まっていたの

もしかしたら俺の命も
急にあんたに握り潰されるかも

わずかな悪夢も一度見てるから
決してそうじゃないとは
言い切れないの

だから決めたの俺の命

『今』と言う現実はまだある限り
一緒に笑って 時には泣かせて
俺も泣かされても また笑えて
そんな日々が続くと良いな
いや俺とお前ならできるよね

こんな気持ちは初めてなの
ってゆうか忘れてただけなんだ
不安なら声を聞いて
それでもダメ？ じゃあ会おう
これなら別れも来なそうでしょ？
問題は素直になれるかな…？

どんなに人と触れ合っても
『絶対』を信じれないと言う
どんな時でも泣かない
君の枯れた涙を見たいだけ

まるでお前はこんぺいとう
尖って強そうに見えるけど
実は甘いだろうと
どんなに考えても
遠回しな言葉を使ってみても

君は理解できないだろう？
だから解りやすく
『好き』に決めたよ

君と想い重なる事
決めてくれた神様ありがとう
また地球を汚すけど
できる限り もう少し
まだ居させてね

Free Two Small Boy

夢を語って 笑われて
あきらめる事を覚えて
小さな部屋に ひきこもって
鍵かける事は忘れて
次々と押し寄せてくる
うんざりなリアルなルール

人を馬鹿にできるのは
自分の方が優れてるってコト
本当にそうなのかい？
胸を張れる 夢があるかい？

『スロースターター』最高の
言い訳だと思っていたでも
ゆっくりし過ぎてた
気が付いたら遅かった
だから盗られるんだね

嘘をついた時 心が痛む
僕らまだ人間

Free Two Small Boy
今になって思い出す

届かないとあきらめていた
忘れかけていたあの夢

F r e e T w o S m a l l B o y

今になって追い掛けた
いつか舞台に昇ってやる
なぜかその姿が目に見え

ひたすら願って 努力しても
扱いは相変わらず酷いけど
笑われるのは抱いたのが
それほど大きい夢ってコト

位置に着いて一歩進んで

振り返る 確かな進歩

失敗繰り返ししても全て

運命なんだと諦めたくないよ

叶わないのが夢

でも叶えようとする事も夢

F r e e T w o S m a l l B o y

今からでも遅くない

錆付いてた指先から

感じる わずかな温もり

F r e e T w o S m a l l B o y

今から何をしよう

考えたその時間の分

探せた事だけ信じていよう

閉じ込めた その身体ごと

気付いたのは

『何もしなくていい』

その誘惑に しがみついていた
気付いたんだ

『このままじゃいけない』

出られないなら来てもらおう
最初からドアは全開だから

追いかけてるから

気付いていない 追われる恐怖

『自由』に行き着いた

気がついたら周りは
誰もいなくて孤独

自分勝手でも良い みじめで良い
生きて行こう共に

Free Two Small Boy

今となつては恥ずかしい

いくつになつても やっぱり

主役と自分を重ねた

Free Two Small Boy

今となつては輝かしい

何になりたいか選べる

道をいくつも持っていたあの頃が

茜空

地球は青いと知っていたけど
実際見たってわけじゃないから
人間不審と言う訳じゃないが
本当なのかな？

地球は青いと決め付けていた
それ以外にも固定願念
人間だってもしかしたら
飛べるかもね

僕が一步前に進む度に
君は二歩も三歩も進むから
いつか愛想を尽かされそうで
怖いと言う度に慰めて？

こんな弱い僕を好きになつて
本当に後悔していないの？
いつかじゃなくて今すぐ
強くなれたら…

町中一望できる高いビル
屋上から見た人は小さく

大して恐くもないものないから
目も閉じない
上を見上げたら茜空
君を思い出してポケットから
最後のタバコと携帯取り出して
電話したよ

『生きている意味が
見つからないから今から死ぬ』と冗談言っただよ
すると驚く程怒るんだ
まるで泣いてる様な声で

『生きている意味が
見つからないなら
私のために生きてみてよ』
君が笑ってごまかした事も
僕は本気にします

代わりに君が
泣いてくれてるのかな？
羽が濡れるから
空すら飛べないや
でもおかげでまだ足は
地面に着いてるよ

雨は嫌いだと言う君はまだ
こんな綺麗な虹を見てないね？
今度は二人並んで見ようね
くだらない約束

君と離れ離れになると思うと

急に死ぬ事が怖くなつたよ

ゴメンじゃ済まされそうにないから

最期まで隣にいるよ

どうせ寝てる時は

死んでるようなものだから

もしも死ぬ時は

眠るように死にたいね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0858c/>

ライトロン～詩集～

2010年10月14日15時02分発行